

テーマセッション3

家族アセスメントツールの活用

養育期の家族へのアプローチ

—FFFS (Feetham 家族機能調査) 日本語版 I を用いて—

川口市保健センター 神庭純子

養育期の家族は、新しい家族関係が形成され、育児に伴う家族全体の生活行動の変化、拡大という課題を達成しなければならない時期である。この時期の家族としての発達課題の達成は、親自身の発達・適応過程であるといえるが、生活リズムや生活行動の変化、家族員の関係性の変化や社会関係の変化は、特に育児の中心的役割を担う母親にとって様々な不安状況をもたらしているといえよう。そうした母親の育児不安やストレスは、子どもの生活や成長発達に影響を及ぼすと考えられることから地域保健活動においては、乳幼児健診や家庭訪問などで先をみこした保健的介入・支援が求められている。そのためには家族の機能状態を客観的にアセスメントし、家族のもつ保健的機能を高めるような働きかけをしていくことが重要であると考えられる。

そこで、家族アセスメントツールの一つとして開発され、その有効性の検討が重ねられている FFFS (Feetham Family Functioning Survey) 日本語版 I を用いて調査を行った。

FFFS は、「家族と個々の家族構成員との関係」「家族とサブシステムとの関係」「家族と社会との関係」の3分野を包括的に捉え、その関係から家族機能を測定している。対象者の性別、配偶者や子どもの有無を問わず使用でき、家族機能の価値及び充足度を得点化することにより介入を必要としている分野を明確にできるという特長をもつ尺度である。

本調査においては母親と父親を対象とすることにより、双方からの家族機能評価を把握し得た。調査の結果から、養育期の家族における育児不安は家族機能の各側面の充足の程度と関連していることが明らかになった。さらに夫婦間において家族機能の現状のとらえ方、価値のおき方及び充足の程度には相違がみられ、特に母親は父親に比べて「精神的なサポート」や「関心事や心配事を相談すること」に価値をおく傾向があり、全体の家族機能評価においては母親の方が父親に比べて充足度が低値、すなわち充足されていない傾向にあることが示され、そのことが母親の認識である育児不安に関係していることが示唆された。

その結果から、アセスメントツールを活用することによって、客観的かつ定量的に家族機能をとらえることができ、このような互いに関連しあっているものとして家族員をとらえることができること、それぞれの立場に立って支えあえる関係性へと目を向ける夫婦関係、家族関係の形成へ向けてのはたらきかけを考える重要な視点であることの示唆を得た。

一方、FFFS を適用することによって、家族機能の充足度が低い特徴的な家族が把握され、育児不安に関わる家族への支援の方向性を得ることができた。

家族看護研究においてアセスメントツールを活用することの可能性と課題について考えていきたい。

テーマセッション3

家族アセスメントツールの活用

共分散構造分析を用いた養育期にある家族の家族機能モデルの構築

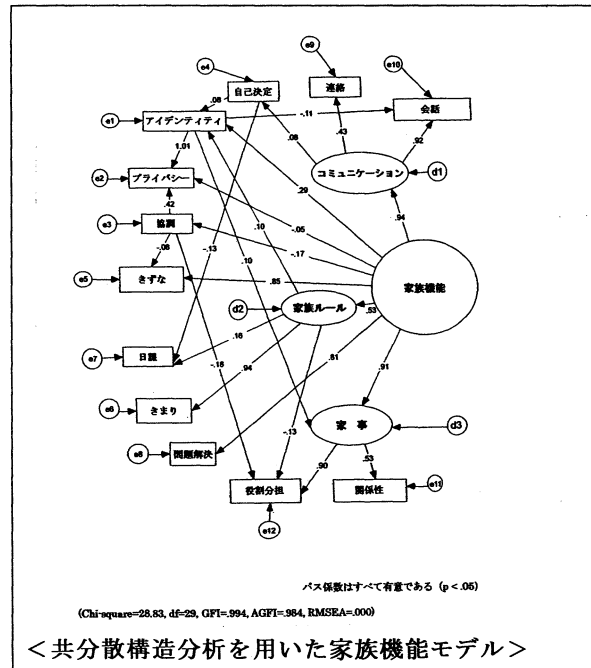
青森県立保健大学 中村由美子

1. はじめに

養育期にある家族は、家族システムの調整や親役割の取得など達成すべき発達課題も多く、家族機能のバランスを保つことが難しいために危機的な状況に陥りやすいといわれている。家族看護介入のためのアセスメント用具はさまざまな視点から開発されているが、現代家族において重要とされている情緒的側面、つまりメンタルヘルス面に焦点をあてて家族の問題やニーズを明確にできるアセスメント用具は少なく、その開発が必要と考えた。そこで、メンタルヘルス面を中心に、わが国の多様な現代家族に適用できる家族機能の概念モデルを構築し、そのモデルに基づいて計量的に家族機能を測定することにより家族の特徴を把握し、看護実践への活用が可能になると考えた。

2. 共分散構造分析を用いた家族機能モデルの構築

中村等の先行研究から、M.A.Whiteを含む看護研究者が開発した家族力学尺度 (Family Dynamics Measure II, 以下 FDM II とする) を養育期にある家族に適用することで、性別や居住地域などグループ間の比較を容易にし、その特性を明らかにできることが確認されていた。しかし、現代の家族のように家族機能が多様化している現状では、FDM II の6つの概念のみで家族機能を説明することが困難になってきており、FDM II の構成概念の再構築が課題となってきた。FDM II の6つの下位尺度はお互いに関連しており、探索的因子分析のみでその構成概念を検討することは困難であった。FDM II のように因子間の複雑な関係を検証する場合には、回帰分析やパス解析といった因果関係モデルでその問題を解決することは難しい。家族機能のように複雑に関連しあった問題を整理していくためには、構造方程式モデリング手法、つまり共分散構造分析が最も適切な方法とされている。



そこで、共分散構造分析を用いて家族機能モデルを提起し、そのモデルにおける要素 (因子) 間の関連性の強さを検討した。さらに、家族機能モデルを性別や居住地域別など特性の異なる集団 (多母集団) に適用して家族機能を計量的に測定し、比較することによって多母集団の特徴を明らかにし、看護介入の視点を定める基礎資料を得ることができた。

最近の統計ソフトの開発により、簡便にいろいろな分析ができるようになってきている。家族アセスメントツールの活用について、皆さんと一緒に考えていきたい。